

〈第35回環境学習セミナー報告〉

## 東京学芸大学探検部創立40周年記念セミナーを開催して

黒澤友彦・小川泰彦

### Memorial Seminar for the 40th Anniversary of Expedition Club of Tokyo Gakugei University

Tomohiko KUROSAWA and Yasuhiko OGAWA,  
Institute for Natural and Cultural History

#### 1. はじめに

1975年に自然文化誌研究会が大学のサークルとしてスタートし、冒険探検部との合併を経て、NGO（任意団体）からNPO（特定非営利活動法人）となって現在に至るまでに、実に40年以上の年月が流れました。その間に東京都小金井市、東京都五日市、埼玉県大滝村、山梨県小菅村を活動拠点として、北は北海道から南は沖縄、海外のタイと東奔西走、あっちに行ったりこっちに行ったりと、自然・文化・冒険をキーワードに活動してきました。

「未来を担う子供たちのために」「かけがえない自然」と「先人たちが培ってきた文化」を生きのまま手渡しできるようにという副題をつけて、「自分たちの知的好奇心を満足させ」つつ、「フロンティアワーク」を目指して試みが続けてきました。今でこそ環境・自然・文化というキーワードは巷にあふれ、手垢まみれとなっていますが、こちとら誰も見向きもしなかった時代から自然や文化にこだわって関わり続けてきた身なので、自然と文化をテーマにした私たちの活動に自負がないといえば、うそになります。

しかし、とにかく過去を振り返ったり、反省したりすることが苦手でしたし、自分の足元のちょっと前あたりを見つめて、ただただ前に進んできた感のある本会です。関わる時期や時間に違いはあるにせよ、いろいろな人たちが40年の間活躍してきましたが、これまで先のことは考えても、過去のことはほとんど顧みることがありませんでした。誰一人として……。創設40年を記念して、ここらでいったん自分たちのやってきたことを振り返って、未来へ向けた糧としようではないかという意見から、今回のセ

ミナーの開催となりました（こういう意見が出され、しかも開催されること自体、本会のメンバーが年をとった証拠なのかもしれませんね）。

当日は懐かしいメンバーが集まりました。セミナーの中では、それぞれの活動がスライドや写真を交えて紹介され、当時の考え方や思いを振り返ってもらいました。本会の誕生秘話やこぼれ話をふまえて、木俣先生には「自然・文化」、塚原氏には「冒険」という切り口から、本会の活動の背景を解説していただきました。そして小菅村の亀井氏とともに、「小菅村の中で自然文化誌研究会が今後どのような活動ができるか」が話し合われました。

充実した時間のなか「お久しぶり！」「元気にしてた？」と、久方ぶりの再会にみんな興奮気味でした。目が血走った青年が、目が血走ったおじ様となり、ちょっといかれたお兄ちゃんが、いかれた中年となり、ちょっと変わった女の子が、ちょっと変わったおばちゃんとなっていました。ここで一つ気づいたことは、姿かたちは変われども中身はあまり変わらないということです。年に応じて責任やしがらみは増し、行動の制限なども増えたでしょうが、基本的な心根の部分は老いないということがわかりました。つまり、「私たちの会は心根の部分はちっとも変わらないし、これからも変わらんのだろうな」という思いを強くしたセミナーでした。

また、切れかかった人と人をつなげる糸が再びつながり、さらに強く結びつくことができたようなセミナーでもありました。忙しいなか参加して下さった方々、ありがとうございました。特に遠くから来て下さった方、感謝感激です。

## 2. 最近の活動

1975年に「自然文化誌研究会（学大探検部）」の創設、1981年に「東京学芸大学冒険探検部」の創設、両者が1985年に合併し「自然文化誌研究会冒険探検部」となったのは、今回聞いて知った。私個人は、1996年に東京学芸大学へ入学。ちょうど20周年記念誌『らぞう』が発行された翌年で、40周年記念の現在、ちょうど中間世代と呼べようか。実際に、初期の冒険学校の参加者たちが同年齢の40歳となっている。

1996年の入学以降、現役学生の「冒険探検部」と卒業生及び関係者が関わる任意団体「自然文化誌研究会」は、ちょっと距離が出てきて、私自身も若いころは現役学生の「冒険探検部」一色だった。

東京学芸大学卒業後は、自然文化誌研究会の事務局長になり、今現在も「冒険探検部」や「サークルちえのわ（ちえのわ農学校主催）」と協力しながら、子どもたちの環境学習事業を進めているので、今となれば深く関係し、歴史も共有する仲間たちでうまく事業を進めていこう～という立場で生きている。「子どものための冒険学校」が大きな事業だが、それを創設したメンバーの目的や行動を聞きながら、やはり自分自身の「冒険」「探検」という関わりが問われる。

自然文化誌研究会は2004年にNPO法人化するとともに、現在の拠点となる山梨県小菅村に移住。私個人の移住ではなく、自然文化誌研究会の移住であった。この考えや行動のバックボーンは当時の理事や運営委員の面々であり、若かった私自身は、移住担当のような形で非自発的に小菅村へ向かったのである。私自身は深く考えることなく、小菅村の方々に指導を受けながら受け入れていただき、子どもたちの環境学習事業をはじめ、現在も進めている「植物と人々の博物館事業」などにも取り組んでいる。

私自身はたまたま小菅村に馴染み、たまたま実家を継ぐなどとは無縁だったので、小菅村に永住する目的で家も建てちゃったりして（この家造りについては、この10年間で本会が開催しているログビルダー養成講座の関係による）の現状である。

さて、40周年後の今後、自然文化誌研究会はどのように進んでいくのか。NPO法人であり、子どもたちの環境学習事業、博物館事業などを主催する団体としては、常に参加者のご案内や協力する（主に）学生スタッフの育成など、事業に必要な業務が存在する。なかなか「冒険」「探検」する暇がないかもしれないな、と感じる。この15年関わってきた学生たちも、「冒険学校」であるけれども、「冒険」「探検」を目指しているわけではないかな、と。

現在の「小菅村（だけでなく、そこから広がるフィールド）」は農山村で、まだまだ本物の事物があるので、そこで丁寧な活動を継続していくことが「冒険」「探検」になると、団体としてはよいのかな、と考える。

「冒険」：本物を知ること、現在のおかしなことから考えや行動を変えられるかどうか。

「探検」：本物を知るための行動。

40年たった現在、こんな形でしょうか？  
個々人が「冒険」「探検」することは大いに歓迎ということ。